

大阪日日新聞・コラム「澗標(みおつくし)」2005年6月24日掲載

水辺の季節・水上交通をめぐる二つの便りから

弘本由香里（大阪ガスエネルギー・文化研究所客員研究員）

いよいよ水辺のシーズン。この1ヶ月ほどの間に、相次いで水上交通にかかわる二つの印象的な便りが届いた。

ひとつは、NPO法人「水辺のまち再生プロジェクト」が毎月発行している、メール・ニュース「水辺通信」のトピックで、「大阪の川を巡るクルーズを始めました！」というもの。金曜日の夜、大阪のまちなかを小型ボート（定員4人）で巡る、とっておきのクルーズを楽しめるという魅力的なサービスである。水辺の楽しみが、またひとつふえたと、胸のときめくニュースであった。

うれしいニュースと対照的に、ひっそりと姿を消すサービスを伝えるニュースも舞い込んだ。大川沿いの団地に暮らす知人から届いたもので、「アクアライナー通勤船」（大阪水上バス）が6月24日から運航休止となることを惜しむ声である。長年通勤にアクアライナーを愛用してきた知人である。将来整備予定の八軒家（天満橋・大川左岸）の船着場からまちにアプローチできる、そんな日が来ることを夢見ていたのにと、残念な思いが滲む。

リバーサイドの住まいから通勤船でオフィスに通う、それこそ水都の生活文化だと、ゆったりとした水上の通勤タイムを満喫し、こだわりを持って利用し続けてきたという。私もかつて乗船してみたことがあるが、水上から護岸の並木を眺めつつ静かに新聞に目を通すなど、驚くほど優雅に通勤時間を過ごすことができる。

アクアライナー観光船が人気を集めているのに対して、アクアライナー通勤船は運行本数が限られていたこともあって、利用者が極めて少ないという厳しさがあった。運行休止は、観光を中心に水上交通の多様化や競争環境が整いつつある中で、やむを得ぬ判断だったのかと、想像するばかりである。

一方、将来整備予定の八軒家浜について、3月末に大阪府が整備計画概要を発表している。第1期整備は、京阪天満橋駅前の大川沿いに、水上バス用のバース（停泊場所）や、水上タクシー・小型船舶用の棧橋のある船着場をつくり、2007年度の完成を目指すという。さらに、第2期整備は、船着場の西側ににぎわい空間としての桜並木や集客施設を計画し、2009年春の完成を目標にしているという。

冒頭の「水辺通信」（水辺のまち再生プロジェクト）は、「天満橋界限が川のターミナルとして蘇る」と、八軒家浜整備のニュースをとりあげ、次のように呼びかけている。「江戸時代に三十石船の発着場として栄えたこの地域が、あらたに川のターミナルとして復活する日が楽しみです。さて、工事は行政に任せるとして、できあがった八軒家浜で私たちがどのように楽しむかを今からせっせと考えましょう。」

水都ならではの日常の豊かな生活文化の一コマとして、いつか再び通勤や通学や、ちょっとしたまちなかの移動にも使える水上交通が、市民権を得ていくことを願ってやまない。